

## 第2回 文化交流施設整備検討会【要旨】

日 時	令和3年9月14日（火）午後6時～午後8時
場 所	オンライン開催
出席者	（委 員）卯月盛夫委員長、齋藤啓子副委員長、沢木拓也委員 羽生冬佳委員、両角達平委員、町田高委員 鎌田理光委員、松田智子委員、小林行男委員 清水啓史委員、志村博委員、富永新三郎委員 北川嘉昭委員、古瀬清美委員 （事務局）伊藤地域文化スポーツ部参事、文化交流推進課担当 松崎再開発担当部長、能見再開発担当課長 住まい街づくり課担当

### 1 開会挨拶、委員出席確認

### 2 議題

#### （1）①事例報告「沢木委員」

- 『BE-PAL』と北九州市の公園「山田緑地」でのパルパークプロジェクトについて事例報告する。

『BE-PAL』は、1981年、アメリカの西海岸でのキャンプ情報を日本に広めようと創刊したアウトドア情報誌であり今年40周年を迎える。キャッチフレーズは「自然を手でつかもう。」である。

創刊から10年後の1990年ごろ、第1次キャンプブームが到来し、キャンプ場はファミリー客で溢れた。

現在は、第1次キャンプブームから2、30年が経過したが、ここ5年ぐらいオートキャンプ人口が増え続けており、現在860万人を超えてるといわれているが、実際のキャンプ人口は、キャンプをする人だけでなく、それ以外の友達や家族など周囲の人口も含めると1,000万人を超えるのではないかと考えられている。

ブームのきっかけには、いろいろな要因があるが、国家公務員の週休二日制の導入や年次有給休暇の取得義務化が大きなきっかけになったと考える。休日が1日増えても自由に使えるお金は限られている中で、キャンプは比較的リーズナブルに、家族で楽しめるものである。

また、昨今では、新型コロナウイルス感染症の関係で、テレワークが主流となったことにより、平日もキャンプ場に人が来ている。時代や働き方の流れとキャ

ンプやアウトドアの流行は非常に影響があると思っている。参考だが、欧米などでは、休暇が比較的取りやすい状況であり、昔から人々に一定程度キャンプが認知されており、日常的に楽しまれているが、日本では、急激なブームにより今まで自然に親しんでこなかった人が新たにキャンプを始めることにより、マナー問題が発生しており、課題となっている。

現在、キャンプ場が急激に増えているが、キャンプ場自体が自然を保護していく拠点となるようなシステム作りや自然教育を担っていけると非常に良いと考えている。第1次キャンプブームの際は、青少年村のような公共施設が多かったが、今回のキャンプブームでは、宿泊体験ができる施設も増えるなど、いろいろな形態で広がりを見せている。今後、キャンプが自然拠点としての役割も担いながら、地方自治体、民間企業、個人とさまざまな形で切磋琢磨して行ってほしいと思っている。

これから報告するパルパークプロジェクトは、まずキャンプブームが前提にある。パルパークプロジェクトは、2016年に20年以上付き合いのあるログハウスメーカーと子どもが自然の中で全力で遊べる公園、例えば木登りや焚き火ができるような五感を育てられるものを作りたいと、BE-PAL前編集長とそのメーカーから始まった。

議論の中で、理想の公園とは何かについて意見交換し、イラスト化しながら考え始め、それを雑誌に連載したところ、造園会社が賛同してくれたため、その造園会社が所有している大きな圃場へ作ることになった。

その後、2018年に北九州市役所公園緑地部の方が、これを北九州市でもできないかと直接編集部にも連絡が入り、プロトタイプ公園を視察してもらった。

北九州市は、人口93万人の政令指定都市で市民1人当たりの都市公園面積は政令指定都市の中で20市中5位とかなり広大であり、パルパークプロジェクトを立ち上げることになった山田緑地という公園は、北九州市の中心地にある140haくらいの土地である。山田緑地は、昭和10年頃から陸軍、その後は米軍の弾薬庫として一般の利用はされていなかったため、非常に豊かな自然が残っており、敷地内の保護区域を除いた場所に、人と森が共生できる里山の森の再生を始めることになり、北九州市と包括提携を締結し、実際にこの山田緑地で何ができるかという検討を始めた。

まず、『BE-PAL』がコラボイベントとして参加者を募集し、公園内の路面電車用の敷石を使い、焚き火場づくりを始めた。小中学生と保護者、焚き火好きな大人たち約80人が集まり、自分たちで選別した石を運び並べることにより、

前方後円型の焚き火場づくりをイベントとして行った。自分で作ったところには、愛着を持つのでイベント後にも来てくれるようになるという循環を狙ったところ、現在、非常にうまくいっている状況にある。

この焚き火場が完成し、次のプロジェクトとして焚き火を中心に継続的に人を集めていくために、「森の焚き人」養成講座を始めた。大人向けのこのプロジェクトは、『BE-PAL』は全体コーディネーターとして、1日目は参加者に焚き火のやり方を教え、2日目は、その参加者が先生となり、子どもたちに焚き火を教えるという形とした。参加者を募集したところ、北九州市以外の福岡市や大分県などから20代から70代ぐらいまで男女16名が集まった。

火打石やファイヤースターターで火をつけ、そのついた火を育てていくという原始的でシンプルなやり方であるが、大人たちも非常にワクワクドキドキすることにより、子どものような顔になっていき、その経験を翌日2日目に、焚き火イベントに集まった子どもたちに教えるというやり方である。このやり方により、サステナブルな公園が実現できるようになってくると考えている。

この養成講座は、知識も身につけ、感動も共有できるうえ、コロナ禍でもあまり密にならないため、地元のボランティアと子どもたちでこのシステムが継続されているようで2期生が誕生しており、『BE-PAL』はたまに行くだけである。

焚き火や緑は見ているだけ、体を動かしているだけで日頃のストレスの解消にもなるし、もともと荒廃していた場所が自分たちの手により、良くなっていくことが目に見えて分かる経験をしていくことで、盛り上がるし人も集まってくる。このプロジェクトは、人が人を呼ぶ形になってきており、自分が他の人に教えながら自分も体験から育っていけるような、サステナブルな場所がさらに増えるように子どもはやっているつもりである。北九州市へも他自治体から視察が来ているようであり、このような自然を通した教育と場所の育て方が成功事例とされているようである。

#### 【質疑応答、意見】

○（委員） 区の事業では、募集を年齢で区切ってしまうことが多いため、森の焚き人養成講座は、年齢性別問わず行っており非常に良いと思う。

また、1日目は生徒で、2日目は先生という講座のやり方も素晴らしいし『BE-PAL』が行かなくても続いていることこそが、人が人をつなぐというところに繋がっていると感じた。

○（委員長） 森の焚き人に集まったのは、20代から70代とあったが、『BE-PAL』の読者層をどれくらいなのか。

- （委員） 『BE-PAL』のテーマは、「自然の遊び場」であるため、幅広い年代が読者層と考えている。
- （委員） 今回、『BE-PAL』のパルパークプロジェクトの報告を受けたが、文化交流施設検討への取り入れ方などを教えてほしい。
- （委員） 自然の中と西日暮里駅前と場所は違うが、人と人がつながることにより、「何か」を作り出すことができるなど、今回の事例報告から、文化交流施設に求められるもののヒントが得られるのではないかと考えている。

そもそもキャンプは、わざわざ不便なことイメージがあるが、そういう不便なことをしたり、子ども心に返ったりすることが、非常に刺激になるため最近のブームとなっており、多くの人が始めている。

そういう人を引きつける魅力あるものを、この文化交流施設を考えるに当たり、参考になるのではないかと考えている。
- （委員） 私も学生時代キャンプをやっていたので、キャンプの意味は理解していたが、文化交流施設は屋内だったので、屋外の事例報告に違和感があったので質問をさせてもらった。

森の焚き人養成講座は、幅広い年代が一緒になり行動をする意義は大変良いと思う。
- （委員長） 駅前の再開発ビルと言うと、都会的なイメージであるが、『BE-PAL』読者や普段キャンプをする人達も、日常では都市的な生活をしているのではないか。私たちは、都市的な生活と自然との融合という両方を求めており、都市的な生活を日常的にしながら、週や月に1回は自然的なところに行きたいと考えているかもしれない。そのための予備的な準備を、例えばだが、駅前の日常的な空間で行うかもしれない。全く違うものだろうが、どこかに接点を見いだされるかもしれないという期待を込めて聞かせてもらった。また、そのことは皆さんと議論していきたい。
- （委員） 焚き人養成を受けた人は、その後、どのように活動されているのか。マネジメントみたいなものはされているのか。
- （委員） 基本的に、山田緑地内で焚き火をやる際には、その人たちに講師をやってもらっている。山田緑地以外に北九州市で焚き火ができる場所は現在ないが、他の公園にも焚き火ができる場所を広げていきたいようではある。
- （委員） 山田緑地で「焚き火をやりたい」という人はどうすればよいのか。イベントの実施者は誰になるのか。現在の焚き人は、2期生ということだが、人数は足りているのか。
- （委員） 月に1回ぐらい無料のイベントを開催しているので参加してもらおう

形である。1回のイベントで、講師は3人～5人いれば足りるので、イベント開催に際し、公園の指定管理者が大体20人ぐらい参加者を募集している。

イベントに際し講師を雇うと、費用が毎度発生してしまうので、山田緑地では、ボランティアで開催できていることと、焚き火は、公園の間伐材を使っているため、費用もあまり掛からないため、やりやすいイベントとなっている。

○（委員） 「日本冒険遊び場づくり協会」でこのようなことと関係しているので、このような場所が増えていくといいなと思う。

質問だが、北九州市と山田緑地の指定管理者と『BE-PAL』の関係はどのようなかたちか。

○（委員） 基本的に市役所と『BE-PAL』が企画を考え、指定管理者は、イベントの実施に際し、参加者募集や応募者の管理をやるなど、分担している。

○（委員） 指定管理者と企業と市民が一緒にやる機運が高まっているということが、とても珍しい。組み合わせの可能性がいろいろありそうである。

○（委員） 今、自治体がアウトドアブランド会社と包括提携することが増えてはいるが、公園行政では珍しいと思う。

○（委員） 行政や公共が、企業とどのように距離を取るのかと感じた。考え方により、企業のマーケティングに使われているのではないかと思う人もいるため、行政としてどういう立場なのかをはっきりしておくべき必要があると思う。

国立青少年教育振興機構は、全国各地に青少年の体験施設を持っているが、人が来なくなってしまっている。非日常性を魅力的な空間となり得る文化交流施設にどうやって取り入れるのかを考えたさせられた。

○（委員） 『BE-PAL』自体が企業であるので、今回のビーパルプロジェクト実施に際し自治体に確認は行った。このような取組は、特別なものと考えてやっていければと思っている。

例えば今、渋谷の商業施設内(パルコ)でアウトドアフロアをうまく取り入れ、アウトドアのよさを閉鎖空間でも作っているが、快適でリラックスできる空間ができるのではないかなと思っている。

○（委員） 私はキャンプ等をなかなかしないが、キャンプの醍醐味は、非日常性なのか。この文化交流施設に取り入れる場合は、例えば普段は学校や会社、家庭、スーパーなどを往復する中で、文化交流施設に行くと非日常を感じられることが1つの視点となるのか。

○（委員） キャンプは、非日常の中で癒やされる効果が非常に高いうえ、キャンプに行くたびに自分のスキルが上がっていることを実感しやすいと思う。例えば、焚き火の火をつけることにしても、最初はすごく下手だったのが、回を

重ねるごとに上手になり、自分が成長したことが大人でも感じる事が出来る。音楽を習うことと似ているところもあり、キャンプが癒やしと学び、自分の成長を確認できる場にもなっており、ブームの一助になっていると考える。

- （委員長） 私たちは、日常、非日常という使い分けをする。1年に1回程度行く場所ならば、非日常という言葉が合う気がするが、『BE-PAL』が影響しているようなことは、非日常よりもっと、日常に近いものがあるのではないか。要は、日常を変えていこうというような、あるいはライフスタイルを変えていこうということがあるような気がする。

都市的生活をしている私たちには、保養が必要と思っているが、保養にもいろいろなランクがあり、今回の文化交流施設も日常と非日常を連続的に捉えることもできるのではないかなど考えた。

- （委員） 区ではこれから、公園を整備していくが、山田緑地内の公園のようなものが、区でもできないだろうか。また、例えば、西日暮里の施設の屋上でアウトドア体験ができないかと考えたが、いかがか。
- （委員） コロナ禍で中止となってしまったが、『BE-PAL』のイベントで都心のデパートの屋上でキャンプをやろうとした。街なかの屋上でも、空を見上げれば気持ちよさは自然の中と同じように味わえるので、広い空間を実感できる場所として、屋上を開放していただけたら使ってみたいと感じる。
- （委員長） 例えば、屋上だけでなく駅前広場という案もあるのではないかと考えている。
- （委員） 文化交流施設から近い西日暮里公園に赤ちゃんから大人までを対象にしている「あらかわ冒険遊び場の会」というのがあり、荒川区にも自然環境を活かして遊ぶ試みがある。
- （委員長） 西日暮里公園と文化交流施設と屋上とが連携するようなことが出てくると面白いかもしれない。

#### （1）②事例報告「両角委員」

- テーマは「若者のためのユースセンターの作り方—スウェーデンの事例」であるが、若者に限らず、その地域に住んでいる人たちのための施設はどうやって作ればいいのかということ、スウェーデンの事例から報告をさせていただく。

まず、特筆すべきこととして、スウェーデンは、住んでいる地域に自分自身が影響を与えたいと思っている人が多く、特に若者は非常に社会参加をされると言われており、若者の選挙投票率は85%を超えているほど、意識が高い国で

ある。

その関心の高さに繋がる要因として、若者は、いろいろな場所で活動できる機会がある。まず、スウェーデンの学校教育として、自分で物事を決めることを教えており、例えば、何を食べたいのか、どんな授業を受けたいのか、どんな施設がこの教室に欲しいのかなど多種にわたる事柄を、とにかく話し合うということを徹底して学校の中でやっており、自分の影響力を社会に発揮できることを大事にしているし、若者の多くが若者団体に加入している。若者団体というのは、日本でいう大学のサークルのようなものだが、スウェーデンには部活動や塾がないため、余暇時間は若者団体に自由活動している。

若者団体の活動拠点が地域のあちこちにあるユースセンターであり、若者の2割くらいが利用している。職員以外に専門的な知見やスキルを持った余暇リーダーという職員もあり、若者の余暇時間が充実できるようアドバイスしている。ユースセンターでは、活動ばかりするよりは、第二のお家、サードプレイスと思えるようリラックスした空間を一番大事にしている。

ユースセンターで大事にしていることは、3つあり、まず、1つは開放性、誰に対しても開かれており、会員証や利用料がなく大人も使えるため、地域の公民館のイメージであり、施設利用の障壁を下げている。

2つ目は、自由性であり、余暇活動というと何かと講座をやりがちだが、講座ばかりでなく、若者発出のプロジェクトが生まれるような余地を残している。集団的な活動ばかりではなく個人1人でも始められるため、そこから仲間が増えていくことで、施設の運営側にも若者が参画していく流れとなっており、若者の声を聞くことを大事にしている。そのため、良いユースセンターは、若者自身が施設の運営協議会に参加している。

3つ目が無目的性であり、目的がない人でも来られるような場所づくりを大事にしている。様々な活動ができる部屋がユースセンターの奥側にあるが、その手前に無目的な空間としてのカフェや椅子が置いてあり、その空間こそが一番大事と言われている。その空間自体が、自分たちの居場所になり得るし、安心した空間があるからそこに集まれるし、無目的だからこそ、そこから何か新しいことが生まれるし、目的がない人も行きやすい場所となっているようである。

ユースセンターを若者と一緒に作った余暇リーダーに作った理由を聞いたところ、地域に若者向けの施設がほとんどなかったため、地域住人を集め対話集会を開催した結果、若者と大人の間でコミュニケーションがきちんとできておらず、若者が地域から排除されてしまっていた。それでは良くないと思い、ユ

ースセンターを作ろうとなった。

施設づくりを開始する際に、他地域のユースセンターの職員との会議と並行して、地域の若者スポットでプロジェクト参加への声かけをした結果、多くの若者がやる気になってくれた。やはり、施設づくりに大事なことは、若者自身が参画を望み、若者が自分の能力を信じ、その事業に関わる人達を若者が感じられるようにすることである。自分たちが声を発したら、それが本当に届くことが必要である。そして、施設が完成した後も、来館する若者を想定して、立ち上げ職員と若者が一緒に関わり方を考えることで、最終的に、若者たちの施設の運営会議や自主企画グループなどができていった。

KASAM理論というものがあるが、例えば、社会や学校や職場など何かの一員であると感じられるならば、決定への参画をしたくなるし、心地よいと感じるようになるという理論であり、まさに先ほどのユースセンターを作る過程で起きたものである。その関わりが非常に大切であり、それを感じてもらうためには小さな一歩から始めることが必要である。

別の施設の紹介だが、余暇リーダーのような職員もおらず、若者だけで運営している施設があり、この施設は若者だけで運営することにより、『若者』が社会にいることを示している。

施設を運営している19歳の子に「民主主義とは」と質問した際、「自分の声を届かせることができ影響を与えられることである。」というシンプルな答えが返ってきた。「社会が良くなるためには、変化が必要であり、一部の人だけが物事を決めることは良い社会にはならないため、様々な人が関わり、考え方が反映される社会が良い社会になる。」と話しており、ユースセンターを運営している若者がこのような回答をするということは、ユースセンター自体が、そのような役割を担っているということである。

ユースセンターには、若者の2割ぐらいしか行っていないが、その代わり多くの若者は若者団体で活動しているし、若者だけでなく大人も余暇を充実させている。大人も3人以上集まればスタディーサークルという余暇活動が可能で、大人も余暇を楽しめる社会になっている。日本の公民館のような施設で、スウェーデン人の5分の1が参加するほど、文化的な活動を支えている。

住民のための文化交流施設を作るためにスウェーデンから学ぶべきことのまず1つ目は、一方的に与え、それを享受する関係を作らずに、対等性を保っておくことである。

2つ目は、若者や住民は社会の問題ではなく資源である、というポジティブな視点が必要である。



3つ目は、無目的を許容する空間や時間を意図的に作り出すということが大事にされており、施設よりも活動に重きを置いていることである。

公共空間を作るということは、住民がどんな街を作っていきたいかという問いそのものであると思う。住民や若者をお客さんにしないためには、権限を委譲し、相談できる職員を配置し、資源やお金をつけてあげることにより、施設づくりを任すことである。そして、透明性を高めてプロセスを開示していく、人を信じ、しっかり時間をかけてあげ、声をしっかり形にしていくことが求められていると考える。

#### 【質疑応答、意見】

○（委員） 無目的を許容する空間は、安全安心が前提にあることを区民が感じられるためいいと思う。

日本の場合、年長に対する態度や先輩後輩だとパターナリズムに陥ることがあり、若者が対等でいられるものなのか。一方、若者を変えてやろうと言ったら、傲慢な話になってしまう。若者をどうしていくのかというのはなかなか難しいテーマかなと思う。

○（委員） 日本のユースセンターにも行くが、スウェーデンと同様のことが出来ている実情はある。また、ユースセンターを無目的性の観点から考えると、前提条件として、まず安全安心な空間をきちんとと作ることが必要である。

○（委員） 無目的性を許容する空間とあったが、例えば、文化交流施設もあえて何かの施設と決めなくてもいいというものもどうか。区内施設でも、誰でも使えるが、実際は何となく決まった人だけが使ってしまった。ユースセンターが、排他的となってしまう課題はないのか。

○（委員） 昔議論になったが、日本のユースセンターや居場所づくりでは、その居場所が閉じた居場所になってしまい、公共の場所になっていないことがあった。何が課題だったかというところと風通しやその空間が開かれているかどうかだった。

スウェーデンのユースセンターでは、無目的と言いつつも、若者が余暇をする場所であり、余暇に目的はないとも考えるが、余暇をする目的でやってきているため、こちら側が何を公共的な空間と考えるかが、ボーダーラインとなってくると思う。

○（委員長） 無目的な空間とはいえ、計画者側は、空間と時間を意図的に作り出すということだったので、ただ何もしないで広い空間を作るわけではない。無目的な空間を作るため、事前に住民と会話をし、どういう体験や活動をした

いかなどを検討するためのプロセスがあって初めて、表面上は無目的な時間と空間ができていると私は認識した。その辺がとても大事なのではないかと思った。

○（委員） 西日暮里駅周辺は、尾久や南千住地域からは少し遠いので、区民がバランスよく使える方法がないか考えており、例えば各地域でピックアップされたメンバーが使うなどもどうかと思っているが、まだ検討時間があるので幅広いアイデアを考えたい。

○（委員） 開放性と自由性と無目的性は、若者に限らずさまざまな人にとって重要なキーワードだと思うが、実現するために高度なマネジメントが必要と考える。

ユースセンターの若者たちが話し合う場合、どのような方法を取っているのか。また、スウェーデンの場合、小学生時代から自分たちでいろいろ話し合い決めていくことをやっているようだが、その詳細を知っていたら教えてほしい。

○（委員） 話し合う内容だが、日本の学生サークルなどと一緒でどのような運営をするか誰が代表になるかなどで、差異はない。違いとしては、スウェーデンでは、その議論の作法が皆よく分かっているため、議事録の作成、相手を尊重し話をしっかり聞く、論破しない、相手をジャッジしない、罵らない、丁寧なコミュニケーションで対話をしっかりとしていくことを行っている。

空間は、人と人との関係性や活動がなくなると誰も利用しなくなってしまう。そういう関係性を考えていかないといけない。

○（委員長） 今日の事例報告と質疑応答は以上となるが、今後の議論で今回の内容がキーワードとして出てくる可能性があるので、次回も続けていきたい。

## （２）再開発における西日暮里駅周辺の動線について

○（事務局） 配布資料について説明する。資料２－１は、再開発地区周辺でポイントとなる施設との位置関係や駅周辺の状況を写真で示した資料である。再開発事業による波及効果で『ルートにっぽり』も人の流れを活発にしたいと考えている。

写真１は、開成高校からの歩行者動線となる歩道であり現在の幅員は、３から３．５ｍ程度となっている。写真４は、ＪＲ西日暮里駅の出入り口付近であり、すぐ脇にある『西日暮里スクランブル』の建物は、ペDESTリアンデッキ整備に伴い撤去する予定となっている。この建物辺りにエスカレーターやエレベーター、階段を整備し、ペDESTリアンデッキとの昇降を行う計画である。

資料２－２は、再開発ビルとペDESTリアンデッキと交通広場の位置関係を

示している。

資料 2-3 は、西日暮里駅前地区市街地再開発準備組合が実施した歩行者交通量調査データを参考に、再開発施設へのアプローチ動線を示した資料である。再開発施設から駅への動線の計画は、ペDESTロリアンデッキで道灌山通りを渡り、駅前に整備するエスカレーター等を利用しデッキから下り、駅構内に入っていくことを予定している。また、駅から交通広場へ下りる動線は、一度駅前のエスカレーター等でペDESTロリアンデッキに上り、交通広場に整備を予定するエスカレーター等で下りる形を想定しているが、どちらの動線についても今後の検討により変更となる可能性がある。

また、鉄道利用者を緑、周辺地域を含む歩行者動線を青で色分けしており、鉄道利用者は、時間当たり最大で 2,000 名ほど、歩行者は約 4,000 名、そのうち北側から訪れる方は 1,500 名ほどを想定している。通行量の多さを矢印の太さで示している。

現在想定しているペDESTロリアンデッキの幅員は、JR 側は、6 m ぐらいと見込んでいる。

現在の計画では、商業施設の出入口が南側と東西側にあり、南側の出入口から入ってすぐ右手のエレベーターから 7 階の文化交流施設へアプローチする形である。エスカレーターの場合は、商業施設の奥のものを使用する形となる。

資料 2-4 は、茶色い部分が、縦動線であり、屋上部分は、現在検討途中のため、利用方法等については決まっていない。

- （委員長） 動線については、細かな部分があると想定されるうえ、本日の会議時間が限られているため、まず、図面を確認し、次回等にまとめて質疑応答などをしていきたい。

### （3）その他

- （委員長） 第 1 回目の会議の際、なるべく早い段階から区民意見を聴取したほうがいいのではないかと意見があったことについて、事務局と議論したので、結果について共有したい。
- （事務局） 区民意見の聴取だが、施設を決めていく際に、区民から意見を聴取することが大変重要だということを認識した。区民意見の聴取のタイミングだが、文化交流施設の根幹をまず、検討会ではっきりと決めたのち、区民の意見を聞いたほうが、より聴取する目的を意識した状態でヒアリングできるのではないかと考えている。

そのために、まずは次回以降も事例報告をいただきながら、検討会で施設のこ

ンセプトについて議論した後、区民意見の聴取方法について検討させていただけたらと思っている。

- （委員長） 区民意見の聴取については、もちろんアンケートではなく、直接声を聴いていく必要がある。ただ、この検討会でまず、施設の方向性を定めた上で目的を示して聞いていく必要があるだろう。場合によっては今後、意見聴取した人たちに施設の運営にも関わってもらう可能性もあるだろう。

ヒアリングする具体的な時期としては、来年か来年度以降になるかと思うが、来年初めにその議論をしていきたいと事務局と検討したので、理解頂きたい。

本日の検討会では、沢木委員と両角委員の事例報告から議論を行った。事例報告の内容が、文化交流施設と乖離しているのではないかというご意見もあったが、例えば公園やユースセンターの事例報告もひよっとしたらどこかの部分が文化交流施設と繋がる場所も出てくるのではないかと考えながら興味深く聞かせていただいた。

再開発ビルの設計を始めるまでに時間はあるが、実際に駅前のこの限られた空間でどんな活動や体験をしたいのか、どのようにしたらふらりと行きたくなるかなどを考えていけたらと思っている。文化交流施設を考えるに当たり、時間を有効に使い私たちも議論を重ねながら、一見違う方法論となるかもしれないが、試行錯誤を繰り返しながら、区民意見を聴取し、悔いのない検討会としていきたい。

次回も委員の事例報告と議論を行っていききたいと考えている。

### 3 次回日程

10月28日（木）

### 4 事務局からの事務連絡